

父、^{カン}康 ^{ギョンスー}景壽の生い立ちと渡日後の暮らし

—この資料は、1937年～1949年ごろまでの私的な見聞録(2023年11月27日)—

^{カン} ^{ドンファン}
康 東勲



おおさかみづこう
大阪築港に上陸する朝鮮人(朝鮮総督府『朝鮮の人口現象』1927(昭和2)年 (『写真で見る在日コリアンの100年』明石書店)

2023年11月30日 千葉市民活動支援センター (聞き取り:市川まり子 宮崎博史 / まとめ:宮崎博史)



はじめに

康さん：茂原海軍航空基地の飯場が町保（まちぼ）にあったのです。今、面影はないと思いますよ。1995（平成 7）年ごろ、今から 30 年くらい前までは行っていたのですが、それ以降どう変わったかわかりませんが、あそこが飯場で、長屋のような一軒家やバラック建ての建物があったのです。そこに『海をわたった家族』を書いた安順伊（アン・スニ）さんはいたのです。北海道の炭鉱から逃げて来られたご主人と一緒に、町保の飯場で暮らしていたのです。

市川さんから機会をいただいて、戦争中の話を聞きたいということで断片的にお話ししたことがありました。今まで細切れになっていたのですが、今日はまとめてお話させていただきます。父親の生い立ちから始めて、どうやって日本に来たのかをお話したいと思います。父親のことを中心にお話しますので、私的な見聞録といたしました。

父の名前は朝鮮語で、カン・ギョンスーと読みます。『父、カン・ギョンスーの生い立ちと渡日後の暮らし』ということでお話しします。

「ツー」と「ゾー」の発音がうまくできないのです。これは朝鮮語の発音の問題で、「ゾー」が難しく「ツー」と発音するのですね。関東大震災の時に朝鮮人が『15 円 50 銭』とか『1 円 50 銭』と言わされて引かかるのは、『イチエンゴジュッセン』をうまく発音できないからなのです。

1 父は1906(明治 39)年、済州道(チェジュド)の農家に生まれ育ちます。宗孫(チョンソン 家長)を継ぎますが、当時の朝鮮土地改良令により 6 千坪の畑と数頭の牛等を収奪され、1936(昭和 11)年 30 歳の時に、夫婦で出稼ぎ労働者として大阪に来ました。

康さん：父は済州道で、本家の宗孫 19 代として生まれました。先祖は高麗時代の幕僚で 1392 年に亡命したとの碑が、解放後済州島で見つかっています。宗孫というのは、もともとの子孫の孫だという意味なのです、ただの家長じゃないのですよ。私も日本語にうまく訳せなくて家長としたのですが、日本で言うと一族の本家の家長ということなのです。朝鮮の宗孫というのは、本家本元の孫ということになるのです。ですからそれをたどっていくと済州島に来て父は 19 代、私は 20 代ということがわかるのです。

朝鮮が日本の植民地になって、1930 年代に朝鮮の伝統的なものは抹消されていくわけですが、全部これは消されていくのですよ。だからその碑もうずもれていたものが、解放後に掘り出されていくわけですね。

朝鮮には本貫（ブンガン）というものがあります。本貫は本家という意味なのです。例えば初めて会う時に、『私はキン・エイクンです』と自己紹介されると、私は『どこのキンなのか』と聞くのです。すると『慶州のキンだとか、どこそこのキンだとか』、『私はどこそこのキンだから、あなたは私より 3 代下だ』とかいうことになるのです。これが本貫なのです。たどれるのです。これが朝鮮では重要なのです。日本のどこそこの誰それというのとちょっと違うのです。

私の本貫は谷山(コクサン)と言います。今、通名は康本(やすもと)となっていますけれども、大阪に渡った頃父は谷山(たにやま)と名乗っていました。

私たちの始祖は古代朝鮮時代、現在の中国の遼寧省の谷山(コクサン)にいたそうです。北京よりのところなのです。そこから高句麗の滅亡によって移住して、今日の平安南北道の谷山(コクサン)、信川(シンセン)、載寧(ネイサイ)に祖先が定住したという伝説があるのですよ。今もすべて地名があります。この三か所に祖先が住んだという記録があるのです。その後さらに高麗が滅んだために亡命して済州島に来たのです。本貫が 10 本というのは少ないのです。ですから 3 本以外に、枝分かれしていったところが 7 本あるのですが何人もいないのです。どこか方々で暮らして谷山(コクサン)の子孫だと名乗った人がいるはずですよ。

日本で同胞の皆さんが通名で使っているでしょう。創氏改名があったということをご存じですよ。日本名にしろとなったときに、本貫を元にして日本名の苗字を作るのです。通名で金城とか金田とか、松本とか青山とかありますが、これは全部本貫がもとになっているのです。本貫を通名として名乗っているのです。ですから私なんかは通名から本貫を予想して、この人の本名はおそらく李だとか、金だとか見当がつくのです。

宮崎：つまり、日本人には分からないように本貫を残そうとしていたのですね。

康さん：そうなのですね。朝鮮では苗字を変えるということは、命を捨てることなのです。ですから子どもが悪いことをしたときに日本では『二度と敷居を跨ぐな』とありますが、朝鮮では『姓を変えろ』というのです。その苗字を名乗れなければもう人間じゃないということなのです。苗字がないのです。苗字のない人間なんていうのは、動物と同じなのです。ですからこれは大変なことなのです。ですから創氏改名の時にも、本貫を日本名として残していたのです。

宮崎：朝鮮では族譜(ぞくふ)を大切にしてきたと聞いたことがあります。

康さん：ですから家系図みたいなものです。私も子どもの時見たことあるのですが、和紙に書いたこんなに袋に入ったのを見たことあるのです。製本されてないのです。植民地時代ですから内々で持っていたわけです。それが日本人に発覚して燃やされてしまったりしています。解放後、故郷に行ったときに聞いたのですが、族譜は日本に持って行ったはずでここにはないと言われたのです。だから最近記憶に基づいて作られて、また出版されていますね。

《関連事項》

高句麗は 668 年に唐と新羅に滅ぼされ、唐が支配。

高麗はモンゴル帝国(元)の侵略を受けたのち衰退し、1392 年に滅亡。

その後李氏朝鮮が 1897 年まで支配。

(1) 家族関係、渡日環境

康さん：父は子どもの頃塾で漢文を学び、後に普通小学校を卒業しました。そこで 4 年制の日本語の教育を受けています。1916(大正 5)年、10 歳の時に祖父が死亡して、宗孫を継ぎ家業に従事するのです。10 歳で康氏一族の冠婚葬祭等々全般をつかさどるわけです。1921(大正 10)年、15 歳で結婚しました。

当時の境遇なのですが、1912(大正元)年から 1918(大正 7)年に土地調査令に基づく調査

が一応終了するのです。その後1927(昭和2)年12月に、朝鮮土地改良令で朝鮮人自作農等の土地の更なる収奪がありました。

濟州島の場合うちの面などでは、収奪方法として自作農たちを対象としての花札博打が毎晩行われたといわれています。父も誘われて断れず参加し、儲けさせられ虜にさせられるわけです。はじめは儲けさせておいて、結局負けて借金の肩代わりに畑や家畜、家屋を手放され破産させられました。財産を取り返すべく、雑役など稼げる仕事を何でも死に物狂いにしたそうです。

にっちもさっちもいかに困っている時、役場の書記が何回もしつこく訪ねてきては『日本に行けば、金儲けができる。稼いで財産を取り戻せる』と口説かれて渡日を決心したのです。ですから父親の場合は強制連行ではないのです。だけれども『日本に行ったら何とかなる』と役人に言われてきたのです。

慰安婦もそうですね。『日本に行って働けばなんとかなる』と口説かれて、『じゃあ行きましょう』と行ったところが、そういうところだったのです。

役場の書記は日本人です。花札は日本人が朝鮮人に教えたのです。朝鮮に花札を持ちこむのです。父親はこの話をあまりしませんでした。負けたことないって言って。花札の親を日本人に操られた人がやるわけです。借金つくらせて小作人に転落させて、日本に行かせればいいわけです。後で父が日本で聞くと、自作農だったのに花札博打で破産して日本に渡って来たって人が大勢いたそうです。

強制連行はみな未婚の若い人ですよ。夫婦は強制連行しないのです。夫婦をどういう風に面倒見るのですか。大部屋に夫婦を寝かせることできないでしょ。夫婦は強制連行させないで、独身の若いだけを連れて行くのです。だいたい仕事のできる働ける10代、20代なのです。今の外国人技能実習生と同じなのです。若い人でしょう、夫婦では来ないでしょう。言葉悪いですけど、技能実習生は現代版の徴用ですよ。技能実習生は給料がもらえないとか、いろいろ問題あるでしょう。

濟州島には泥棒がいなかったか乞食がいなかったか、馬が多いとか、女性が多いとか言われます。気候的には豊かです。でも濟州島ではあまりコメは獲れないので豊かではないのです。6千坪の畑は主に雑穀なのです。麦だとかの畑なのです。戦後はミカン畑にしてきたのです。

1938(昭和13)年5月、国家総動員法に基づいて朝鮮人強制連行が始まります。

1941(昭和16)年には日本国内での国内徴用が開始されるのです。これで父親たちも国内徴用されるのです。家庭を持った在日朝鮮人は全員国内徴用の対象になるわけです。日本の若い人たちはみんな軍人として戦場に行ってしまうってないでしょ。日本人の代わりに働くのです。そういう状況になるのです。父は国内徴用なのです。

《関連事項》

1904年日露戦争	1931年満州事変
1905年ポーツマス条約	1937年日中戦争 盧溝橋事件
1908年東洋拓殖株式会社創立	1939年創氏改名
1909年初代統監伊藤博文暗殺	1941年アジア・太平洋戦争
1910年韓国併合に関する条約 朝鮮総督府	1945年ポツダム宣言受諾 解放
1919年3・1独立運動弾圧	1948年大韓民国建国
1923年関東大震災 朝鮮人虐殺	朝鮮民主主義人民共和国建国

(2) 定住することなく、転々と不安定な生活

康さん：1936(昭和11)年、父は30歳の時祖母と姉3人を故郷に残して、大阪市猪飼野(いかい)区7丁目の朝鮮人部落に落ち着き、ハサミ工場等々で夫婦して働くようになりました。母親が1940(昭和15)年に故郷を訪問したのが最後になりました。文通はありました。猪飼野には朝鮮人部落、飯場があったのじゃないかと思います。今も朝鮮人学校があります。ここに濟州島の人が沢山いたのです。濟州島と大阪には連絡船はありませんが*、強制連行のずっと前から大阪との関係はあったそうです。濟州島の人は猪飼野の身寄りを頼りにして大阪に渡ったようです。日本の色々な情報を耳にしていたそうです。ですから『陸地の人は何も知らないのだ、濟州島は文明の開明が早かった』と濟州島の人は言うのです。それは大阪とのつながりがあったからなのです。父は紹介されて自発的に大阪に行きました。私は1937(昭和12)年に猪飼野で生まれました。

*1923(大正12)年から濟州島と大阪築港に定期航路『君が代丸』が就航したため、猪飼野には濟州島出身が多かったようです。後で康さんに確認すると、お父さんはよく『築港(ちっこう)』と言っていたそうです。(宮崎)

5年後の1941(昭和16)年、父は35歳の時に国内徴用を受けて東京に移ります。現在の東京都品川区小山(旧荏原区小山町)、江古田、南品川等々の朝鮮人部落を転々としています。仕事の内容はわかりません。国内徴用で大阪から東京に行かされたのです。自分勝手ではなく、当局が通行証明書を発行して、指示したところに行かされるわけです。証明書がないと切符も買えないでしょう。自分勝手にはできないのです。

私は東京に来たときは4歳くらいでしたから、その時の生活環境の記憶はほとんどありません。覚えているのは東京で白いパンと干シバナナを母にねだり、『その店になぜ生まれなかったのだ』と困らせたことだけです。当時の住まいは塀で囲まれた長屋で、女たちが大勢で洗濯していました。塀に囲まれた長屋でした。

私が小1の時、『喧嘩をできない様に、焼きを入れろ!』との日本人の意見に、母は『わしを殺せ!』と猛反対で一騒動がありました。無事に済んだとの事です。今でいう焼きゴテですよ。

3年後の1944(昭和19)年7月、父は38歳の時に国内徴用で現在の千葉市中央区川崎町、旧今井町の日立航空機千葉工場内の飯場にさらに移されて、解放直前まで他の一家族と共にいたのです。その時は両親と弟、妹の5人家族でした。

国内徴用された時の日立航空機での具体的な仕事の内容は聞かされず、ただ日立航空機が建てられた埋立地の石垣工事を進めたと父は言っていました。今もその石垣の一部は、国道16号線沿いに残っているのです。蘇我駅前から浜野に向かって海側に石垣が今も残っています。運河があつて埋立地を造成したのです。日立航空機はその埋立地にあったのです。ずっとあそこはもともと砂場でした。解放後になって川崎製鉄が来るのです。

(3) 最貧困層の奴隸的な暮らしを強いられた国内徴用

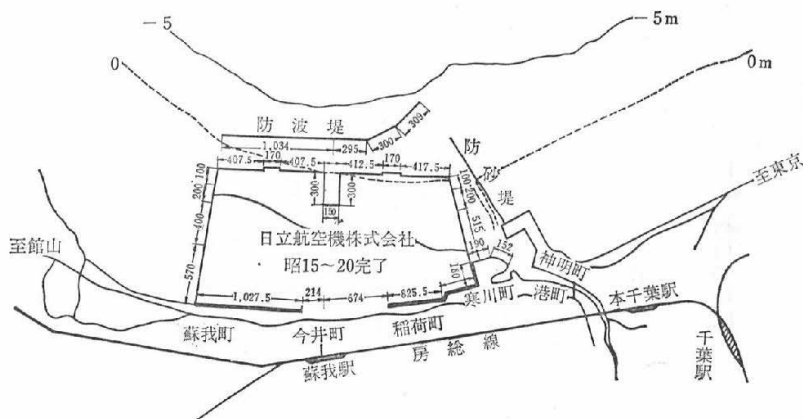
康さん：日立航空機の工場内の飯場の生活環境なのですが、住まいは、物置小屋を改造した部屋で5人が暮らしました。土間には丸い油カンのかまどと、七輪(火鉢兼用)、水桶とひしゃく、板床の部屋にはワラムシロを敷くだけです。

寝具はワラ布団と木枕。角棒でできた枕です。掃除は草ほうき。一つの部屋に雑魚寝です。明るくなれば起きて、暗くなれば寝る。電気はなく、ランプの代用品でした。皿に油と芯をのせて、よく日本の時代劇の農家ででてくるものです。履物はワラゾウリだけでした。

飲食は鍋のような大きな器に盛ったご飯をみんなと一緒に食べました。白いご飯を食べた記憶は全然ないのです。野菜とかたくさん入った中に米粒があるかないかのビビンバみたいなものでした。

父にはお椀に盛ったものを差し上げていました。父親は家長だから別格なのです。しきたりなのです。家長は敬うわけです。

スープ、お茶の代わりにヤカンの水を回し呑んだのです、口で。コップなんてないのです。お膳はリンゴ箱を繋ぎ合わせた台でした。何を食べたのか食事の内容は記憶がないのです。炊事は鉄釜と



5-18図 昭和15年6月土木会議の計画の1

2~3の鍋だけでした。あれこれ食べ物の美味しさ、まずさというものは覚えていません。褒められたとか、嬉しかったとか、怒られたとかいう記憶はなにもなく、家族団らんの雰囲気すらなにも知らなかったのです。

食料などは会社のおそらく支給品で、工場外への外出は禁じられ、東京では4月から荏原国民学校1年に入学していたのですが、こちらに来てからは学校に通っていないのです。

7月に蘇我駅前の駅弁屋の新月堂で買ってくれたアイスキャンディーと、翌年の3月9日の東京大空襲の夜中、父に起こされ窓越しに対岸の燃えている真っ赤な夜空に、銀色に輝くキャップ程の物体を見たことを覚えています。その時、父に『あれは敵機、B29だ！よく見ておけ！忘れるな！今東京は火の海で家が燃えているので、空が赤く見えるのだ。恐らくあの下では大勢の人々が死んでいるはずだ。お前の将来のためによく見てしっかり覚えておけ！』と言われたことしか記憶にないのです。

日立航空機の飯場には風呂もなかったし、夏場の大人たちは手ぬぐいで体を拭くか、互いに背中を流すだけです。子供らは洗濯用のたらいで行水です。冬場はぬれた手ぬぐいで体を拭くだけです。水は貴重品で、会社の井戸水をもらっていたそうです。ですから食料もみんな日立航空機から提供されていたのです。外で買い物するとかは一切なかったのです。

トイレは板で囲い、板を置いただけのボタン便所です。男は立ち小便です。

2 日立航空機の疎開に伴う会社外での暮らし、祖国解放を迎える

(1) 奴隷のような蘇我での暮らし

康さん：翌年日立航空機の工場疎開にともなって、工場の外へ追い出されました。1945(昭和20)年父が39歳の時、3月からは日立航空機千葉工場の旧正面前に農機具などの物置小屋を借りて、家族が住めるように改造して1955(昭和30)年頃まで長らくここで暮らしました。これはうちが借りたのではなく、日立航空機が農家の地主から物置小屋を借りて家族を移したのです。自分勝手にあちこち行ったわけではないのです。空襲をおそれた日立航空機は、今の大網白里市に突貫工事で地下工場を建設して疎開し始めていたので、こちらでは操業しなくなっていたのです。大網の黒須さんが、地下工場の現地調査や朝鮮人の強制連行について詳しく調べておられます。

ここも電気はなく井戸もない日立航空機の飯場と同じような住居で、毎日さつま芋と味も素っ気もない大豆油搾り粕を固めたおこしの様な物を日に4から5個食べさせられたのです。今では牛の飼料ですよね。代わり映えのしない生活が解放まで続くのです。

父は勤労奉仕で忙しいというだけで詳しい内容は知りませんが、6月10日の蘇我町空襲の後片

付けに数日間駆り出された時のむごい話を父から聞いたのは覚えています。ひどかったんですね。『戦争ってひどいものだ』と言っていました。父は日本への反発心があったのです。

工場の外に出て4月から蘇我国民学校2年生として通うようになったのです。弁当はさつま芋でしたから笑われましたよ。みんなはちゃんとした弁当持ってくるわけです。学校と通学路での民族差別は言い尽くせないほど酷く辛かったのです。朝鮮人はクラスにたった二人しかいませんでした。

しかし、6月に入ると学校に行かなくなったのです。それは教室で鉛筆か消しゴムがなくなったときに、お前だろうと先生に疑われたのです。その時先生に、『みんな鮮人には気をつけろ！』と言われました。2回目疑われた時に『鮮人！前へ出ろ』と教壇に呼び出されて殴られて、柔道で投げ飛ばされたのです。『またお前だろう！鮮人のくせに生意気だ！』と言われて、私は『こんな学校に来るものか』と叫んで、鞆を先生の面前に投げつけて机の上を飛んで出て窓を破って出て行っちゃったのです。それっきり学校には行かなくなりました。

朝、家を出ると千葉寺に行って、山で遊んで夕方になると家に帰るのです。あの当時は空襲の関係で夕方にサイレンを鳴らさなかったのですね。それで大巖寺に鴨とか鶉が帰るのを見て家に帰りました。そういう生活がずっと繰り返されるのです。親は学校に行っていないことを知っていたのか、知らなかったのか何も言わないのです。知っていたはずですが。芋だけ風呂敷にに入れて持って行くのですが、親は何も言わないのです。

戦時中ですから、私たちのことを「鮮人」というのですね。子どもたちだって小さい子は「アイツ鮮人だ！鮮人だ！」って言うわけです。もう少し大きい子は棒切れや竹切れでつついてくるのです。しょっちゅう石を投げてくることもありましたから、頭はこぶだらけでした。「弱虫、毛虫、鮮人野郎！」と言われ、「鮮人！帰れ！」と罵声を浴びるようになったのです。

しかし母に、『お前がバカだからやられるのだ』とことんまでやっつけろと言われ、そのうち喧嘩のコツを覚えるのです。はじめに誰を捕まえるかと考えるのです。アイツだと思ったら、そいつをとことん追っかけて行って、手や足を掴んで咬むのです。力じゃだめだから、そればかりやりました。

それで巡査が家にやってくるのです。私は訴えることができないのです。訴えても信じてもらえないのです。相手にされないのです。でも日本人が訴えると当局は動くのです。私たちは奴隷だったのです。人間じゃないのです。植民地の人間ということはそういうことなのです。

アメリカの黒人差別が奴隷的という気持ちもよくわかります。同じバスに乗るなどか、同じ教室に入るなどか私たちと同じなのです。住居も別でしょ、トイレも別でしょ、汚らわしいと言われて。奴隷と同じなのです。

(2) 1945(昭和20)年8月15日、祖国解放は私たちの生活環境、朝鮮人としての民族的尊厳、法的地位、本国の保護等々をガラリと急変させた

康さん：今では人権、人権と言いますが、この時人権というものはありませんでした。それまでは動物と同じだったのです。

○生活向上に向けての努力

康さん：8月16日解放の翌日頃からですね、今井町の飯場の五田保（ごたっぽ）からの来客が

多くなり、生活向上、同胞たちとの相互協力と親睦を深める問題等が話し合われたと思います。飯場で両親は常に母国語で話していましたから、私は朝鮮語をそれなりに聞き取ることができました。子どもの時から両親は朝鮮語で話していました。済州島の方言でしたが聞き取ることができました。私は話せない、書けないだけなのです。

五田保の人たちは日本が敗戦だとか、終戦とか、解放だとかそんな言葉使わないのです。『日本は手を上げた。チョソヌン、朝鮮は独立した』とだけ言うのですよ。だからこれから協力していかなくちゃならないと話していました。独立したという意味は分からなかったのですが、もういじめられないですむのだなということは子ども心に分かったのです。もういじめられなくてすむのだと。

父は解放後2、3日して、読み書きできず故郷に帰れば笑い者になると言い、私にハングル文字と漢字を教えてくださいました。家庭内では相変わらず母国語で話されていました。その時、千字文を覚えさせられました。千字文読めればすべて読めると。昔千字文の漢字を朝鮮から日本に伝えた僧(王仁のことか?)がいるんですよ。

『ハングルを3時間で覚えろ。できなければ3日間で覚えろ』と言われました。『それで覚えられなければもうやめろ』とも言われました。ハングルはすぐ覚えられるのだからということなのです。

9月初め頃、2年担任の先生が家に来て復学するようにと謝罪しましたが、父親は『解放された祖国へ帰るので日本の学校には行けない』と丁寧に断りました。父は米国製タバコ2カートンを差し上げて帰りました。ストライクという美味しいタバコがあったのです。父は怒りませんでした。日本の教育は受けなくていいと断ったのです。

10月ごろになると、五田保へ行ってハングルを学べと言われ国語講習所に通いました。そこが後に朝鮮小学校につながるわけです。そこを卒業しました。

○未払い賃金交渉と焼酎造り

康さん:その後、父は五田保と連携してカストリ焼酎の製造をしたのです。密造です。他のところでも行われていました。東京方面から日本の皆さんが買い受けに来ました。他ではどぶろく密造事件と報道されましたが、五田保では現物を押収できずに事件にならなかったのです。



朝連千葉朝鮮学院設立時(千葉銀行蘇我出張所)

家でも製造して販売したし、麴の作り方やドラム缶での蒸留酒の焼酎の取り方等々を五田保の人に伝授するのです。警察の手入れを事前に察知し、それをみんなに伝えました。だから事件にならないのです。うちの父に教えてくれた人がいたのです。すると樽に入っているどぶろくを全部流しちゃうのです。明日来るぞってなると流しちゃうのです。道端や溝に匂いは残るのですが、現物が無いから事件にならないのです。大勢の日本人からの知恵の結晶だったのです。ドラム缶の溶接の技術なども教えてくれたのです。

それまでの焼酎造りは、丸いものに下に水、上にどぶろくを入れて作るのです。直にパイプを出して焼酎をとるのです。でもこれは一定の量のところ爆発するのです。事故があちこちで随分起こるのです。

これで困って相談してドラム缶で蒸留器を作るのです。ドラム缶は二段になっているのです。上にドブろく入れて、下は水なのです。その下はかまどです。お湯を沸かしてパイプを通してもう一つのドラム缶に冷水を入れて、冷やして焼酎をとるのです。ここがミソなのです。はじめ出てく

るのは甘くも酸っぱくも味がしないのです。なんの味もしないのです。それからピリッとくるのです。そのあと焼酎になるのです。そして最後はまた水になるのです。その水も一升瓶に何本もとっておくのです。できた焼酎を20度くらいに割るのですが、水で割ると臭くてまずくなるのです、美味しくない。でも最後に取った水で割るとまずくならないのです。

焼酎というのはどこでも作られていました。当時日本には酒がないのです。農家でも誰も作っていないのです。メチルアルコールしかなかったのです。メチルアルコールを飲んで死んだりしたのです。

その時、焼酎を作る大量の米をどう手に入れていたのかということです。

おやじは解放後、日立当局と未払い賃金についての交渉をするのです。賃金を出せと、いち早くするのです。漢文が読めるし、日本語も堪能ですので交渉するのです。日立から、お金じゃなくて現物で貰うわけです。工事用の衣類とか軍服とかたくさんあったのです。あとシッカロールとかです。赤ちゃんのおしめ交換に使う白い粉です。軍ではなく日立が全部物資を持っているのです。鉛筆や帳面や靴だとかいろんなものを父親はもらい受けてきて、それを狭い家の小屋に積んでおいたのです。それを持って田舎に行くのです、茂原なんか。農村でもお金は使い物にならないのです。そこで物々交換で米とか野菜とか食べ物などを仕入れるのです。だから茂原の町保には何でもあったと言われるのです。



▲土に埋めたドブろくを摘発する警官たち(1953年2月、松山市、愛媛新聞社提供)
땅속에 묻어놓은 막걸리를 적발하는 경찰들(마츠야마시)



▲解放3周年を祝う同胞運動会(千葉県茂原市)
해방 3주년을 축하하는 동포운동회(치바현 모바라시)

その後、酒粕で4～5頭の養豚も始めて、千葉屠殺場の職人と知り合うのです。家の前で豚を飼っていました。

1945(昭和20)年暮れに、父は電気を引きました。電柱、電線、工事費、謝礼金などは自己負担で、当時闇電気と言われました。実費で引いたので、その設備は後で東電に寄付したことになるのです。大家の計らいで200メートル先の井戸水を自由に使えるようにもなりました。焼酎造りなんかで使いました。学校から帰ると水運びが大変だったものです。お風呂はドラム缶の五右衛門風呂なのですが、日本のみなさんが作り方なんか教えてくれたのです。解放まで井戸は自由に使わせてくれませんでした。

○同胞たちの親睦を図るべく努力した

康さん：1945(昭和20)年暮れ頃、父は千葉済友親睦会を立ち上げました。済州島の済、友人の友という意味で、千葉市内で12戸ありました。済州島の人だけでした。同胞たちの生活向上と故郷の発展に貢献しようと毎月例会で呼びかけ、相互協力して支えあいました。

父は手紙の代筆を頼まれる度に、書いた手紙を必ず読んで差し上げて喜ばれました。これは本当に難しいことなのです。話を聞いて書いた後、書いた文面を必ず読んであげたのです。頼んだ人は読めないから最後にこれでいいのかと聞いて確かめてあげたのです。『足すことはないのか』と、きめ細かい心遣いなのです。

父は、日本語教育を済州島で受けていたのです。家で漢文も習っていたのです。論語とかも学んでいたのです。4年制の学校では日本語を教えられましたから、日本語もできたのです。しかし日本に渡ってきた人には字を書けない人が多かったのです。

父の物的支援により、精肉屋、寿司屋、飲み屋等々を同胞が営業しました。父は同胞の面倒をよくみました。当時の一般的な同胞の職業は、失業対策事業のニコヨンか屑拾いのバタヤだったので。朝鮮人のやることはこれしかなかった時代でした。

普通の支援はお金ですが、父は物的支援なのです。焼酎を一斗樽で渡すのです。その焼酎を店で使ってもらうのです。『それは返すことはないよ』と。それを使って同胞は肉屋とか飲み屋とか始めるわけです。そういう支援を父はしたのです。

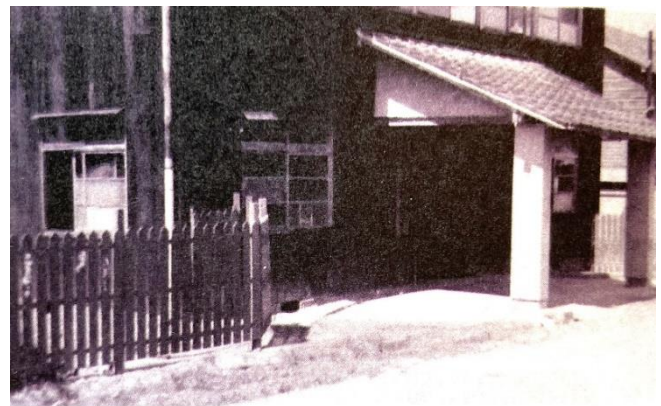
また父は、町内会の今井神社主催の夏祭りや盆踊りにそれなりの寄附金をしていました。警察官駐在所へは盆暮のお歳暮を届けています。これがあつたから五田保はどぶろくを作れたのです。『注意したらいいよ』と事前に情報が入るのです。

父は1955(昭和30)年4月から1958(昭和33)年10月の事故死まで、南町にあった旧千葉朝鮮小学校教育会会長を務めました。また校舎の補修工事や裏の跡地を運動場に整備したり、運営費などを同胞の力で賄ったのです。

1955(昭和30)年5月、千葉済友会は朝鮮総連結成に伴い発展的に解散して、会員は総連の一員としての役割を果たしてきました。父は総連千葉支部副委員長に選出されました。



福岡筑豊地区に残る「アリラン峠」の朝鮮人養豚部落(1962年、山口勲氏撮影)
후쿠오카 치쿠호 지구에 남아있는 '아리랑 고개'의 조선인양돈부락



移転後の朝連千葉朝鮮学院(南町)

○暮らしの様

康さん：1946(昭和21)年元旦から4代までの祖先の命日と正月、お盆の祭祀が復活しました。法事です。それまでは法事ができなかったのです。宗孫として学ぶのですが、祭祀の祀り方など、厳しい修業は辛かったです。

私は1956(昭和31)年3月高校を卒業すると、父に言われて大阪に行きました。20代目宗孫のお披露目会が催されたのです。何も知りませんでした。大阪の親睦会会員の冠婚葬祭には父の名

代を務め、大人たちと同じお膳に座られました。20～30人、広い部屋にはたくさんの方がいました。叔父さんに紹介されて部屋に入るとみんなが一斉に正座しました。真ん中に座り私も正座したのですが、『楽に座れ』と言われました。『正座するな、じっとしている』と言われました。1人ずつ立って自己紹介され、座って私にお辞儀されました。皆さん大阪にいる本貫の一族なのです。宗孫の20代ということで、私の顔を皆さんがわかるようになったのです。それが宗孫の役目なのです。大人と同じに座らせられました。

親睦会会員の葬儀には、必ず故人の光栄を称えた万丈（バンジョウ）のぼりを書いて作って送りました。今では花輪ですね。テレビなんかで東北などで棺の後に、幟を持って歩いてお墓に行きますよね、あれが万丈です。故人を讃える歌が書かれています。朝鮮の場合、男は3年間、女は1年間喪に服すのです。昔はお墓の近くに3年間小屋を作ってそこに暮らすのです。今は仏壇のようなものをつくって、そこに位牌と万丈を3年間飾るのです。そして最後に燃やすのです。花輪というのはずっと後なのです。昔は日本人でも大金持ちは幟みたいなものが家の前にありましたよ。

その後私は、ノート、鉛筆などの学用品を濟州島の親戚にちよくちよく送りました。後に、2002（平成14）年11月故郷を訪問した時、同年配の親戚らから感謝の挨拶を受けました。宗孫のお陰だと言われました。

(3) 近所との付き合い

康さん：その後父は故郷の畑を買い戻し、その収益金で祖先のお墓管理費と、残金は子供らの教育資金に使うようにしました。2002（平成14）年私が故郷訪問の時管理者から聞かれ、土地を使い続けることにしました。今は名義が管理者に代わっていますが。

父親は人情味の豊かさとそれ相応の博識を誇れる人と評価されていました。だから母は口癖のように、『人の面倒をよく見ても、自分のことは何もできない人だ』と嘆いていました。終戦直前の勤労奉仕を通じて知り合った多くの日本人とは、戦後お互いの生活を少なからず支えあったと思います。

1958（昭和33）年10月、川崎製鉄内の工事現場の事故で亡くなりました。52歳でした。葬儀を自宅前のちょっとした空き地に祭壇を設け、執り行ないました。弔辞を朝鮮総連千葉県本部委員長、千葉支部委員長、大林組幹部よりありがたく戴きました。同胞からは、『濟州康本（やすもと）を知らない人はいない』と、知り合いの日本人からも『良くしてくれた、心広い立派な人』と悲しまれました。

父は養豚とか焼酎を作ってしばらく2、3年働いた後、川崎製鉄の工事現場で働くようになっていたのです。だから母は、『あんたは皆に店を持たせてあげているのに、自分は働いていてバカじゃない』とよく言っていました。

3 国内徴用と強制連行について

康さん：国内徴用も強制連行も同じようなものでした。ただ国内徴用より強制連行で来た人はもっと厳しかったのです。集団で広い飯場に閉じ込められて、目が覚めれば飯食って働いて、夜まで働かされたわけです。この繰り返しです。五田保の飯場の人もそうなのです。ですから飯場にいた人達も日立航空機の工場にいた私達も、日本人とは隔離されていたのです。

強制連行についての調査の中で聞いたのですが、日本人は『見るな、話すな、聞くな』と当時言われていたそうです。障子を破ってのぞいてみると、軍服や国民服を着た人がいたけれども朝鮮人とは思わなかったそうです。顔だけでは朝鮮人とはわからないのです。ですから朝鮮人が強制連行

されていたことを多くの日本の人は知らないのですね。

昔は主要な駅には 10 人くらい使える大きな洗面台があったのです。新幹線ができるまで夜行列車のためにです。蘇我駅にもありました。特高警察は朝方そこで首を洗う人を見張っているというのです。日本人は顔を洗いますが、朝鮮人はお風呂に入っていないので首を洗うわけです。それで、これは朝鮮人ということになるのです。『ちょっと来い。旅行証明書を見せろ、強制連行から逃げてきただろう』ということで検挙するのです。特高警察なんかの文献を見ると、そういうのが出てくるのです。それで、みんな捕まっちゃうのです。

安順伊さんのお父さんは運が良かったのです。北海道から東京まで逃げたのですから。才覚ですよ。それだけでなく、私たちを助けるありがたい皆さんが日本にもいたのです。だから逃げてこられたのです。

今も日本の方が強制連行を知らないということは変わっていません。館山市での強制連行調査の記者会見の時も、当局からそういうことは言うなということになってしまいました。ですから市川さん達が草の根で、ピースフェアで伝えてくださってありがたいことです。

市川さん：安順伊さんも穏やかにピースフェアでお話いただきました。でも 2 年前亡くなる前に、娘さんには日本人への恨みだとかを吐き出していて、何十年経っても忘れられないのです。怒りとか悔しさとか抱えていらっしやったのです。

最近学生たちが『ウリハッキョ』の映画会を千葉大で開いてくれました。若い人の中にも関心を持つ人はいるのです。

康さん：『足を踏まれた人は覚えているけど、踏んだ人は忘れる』と言いますが体が覚えているのです。体験した人は忘れることはできないのです。理屈じゃないのです、身体が覚えているのです。

市川さん：差別はアジア、アフリカ等ありますが、在日の皆さんへの差別は独特です。今日は貴重なお話をありがとうございました。まとめて活用させていただきたいと思います。

【写真・地図引用 著作権承認済】

- ・「写真で見ると在日コリアンの 100 年 在日韓人歴史資料館図録」 在日韓人歴史資料館編著 明石書店 2008 年
- ・千葉市史第 2 巻近世・近代編
- ・千葉朝鮮初中級学校創立 75 周年記念誌 記念事業実行委員会制作・編集
- ・愛媛新聞社
- ・国土地理院

『東京大空襲と蘇我空襲の記憶』

1945年3月10日 東京空襲を見た記憶

(1) 夜空に繰り広げられた米日軍の一大パノラマを飯場の窓辺で見る

3月10日、国民学校1年生の時、日立航空機千葉製作所内の飯場で、夜中、父にたたき起こされ言われるまま窓辺に、背伸びしては目をこすりこすり、前の海(対岸は東京)を見ると、下は真っ黒で上は真っ赤に燃えていた。

真っ赤な空には、鉛筆のキャップ程の銀色に輝く物体が南側から北の方向(銚子方面)に炎の上をゆっくりと競うように浮き沈み、その物体は限りなく現れては消え、また現れる模様に見とれながら、良く見ると地上からはサーチライトが左右に交錯し舞い上がった炎の燃えごみがぱっと消え、雨のように降り注ぐ光景はいままで見たことのない、綺麗な夜空の花火のような(不謹慎だが)シルエットに驚きながら夢中になって見とれた。

父に銀色に輝く物体は何かと聞いたら、「あれは敵機(B29)だ！よく見ておけ！今東京は火の海で家がみんな燃えているので、空が赤く見えるんだ、恐らくあの下では大勢の人々が死んでいるはずだ、お前の将来の為によく見てしっかり覚えておけ！」と諭された記憶は今でも生々しくよみがえり、家族や孫たちに話したりしたが、今では3月10日の夜は、西空(東京の方向)を眺め、思い出し、「戦争反対」と握りこぶしに力を入れている。

機銃掃射2回、命拾いした恐ろしさ

(1) 一回目の命拾い

1回目の艦載機機銃掃射は、蘇我国民学校2年生になった1945年5月の始め頃、学校からの帰り道、仲間の知人に「これからそこで(日立航空機千葉工場の分場(今井町))の日立会館で映画が見

られるので来ないか」と誘われ、3人は恐る恐るついてゆき、日本の空軍が勝っている勇ましい空中戦などの激しい戦いの名場面に、私も従業員と共に「わーっ」と歓声を上げ、興奮冷めやらぬまま外へ出て、家路を急いだ。

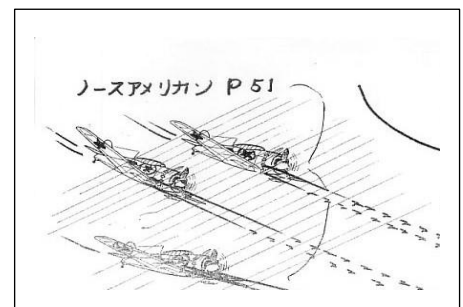
蘇我踏切(現、今井跨線橋)の4~500m手前を午後3時ごろ3人で、「日本軍は凄く強いな」と戦闘場面を思い出しながらそれぞれの感想を話しながら歩いていたら、後ろから「脇へ伏せろ！」と言う大人の大声に何事かと驚き振り返り見たのは、東の方角から敵の艦載機が急降下してきたので、みんなびっくりして、それっと言わんばかりに麦畑になだれ込み、身を縮め、耳を両手で塞ぎ、息を殺していたら「ザザザッ…」という轟音と、横の砂利道は先が見えないぐらい、しばらくの間砂煙がもうもうと立ち上っていた。

艦載機は真つすぐ西の方へ急上昇し、そのとき操縦士はこちらを見ていた。互いに命拾いしたなと喜びながら「敵の顔を見たか!!」「目と目が合った!!」と話し合ったのが昨日の出来事のように生々しく今もよみがえる。

(2) 二回目の命拾い

2回目の機銃掃射も、国民学校2年生の1945年5月半ばごろ、昼下がりの2~3時ごろ、蘇我踏切を仲間3人がそんなこんな話をしながら渡り切ったところで、道の脇から「速くッここへ隠れろ!!」と大人に怒鳴られ、横の小屋に3人が飛び込むと同時に「ザザザッ・・・」と艦載機の機銃掃射を受けたが、私たちとそこのおじさんたちも無事だったし、建物も変わりなかった。おじさんたちに「にしら(お前たち)どこの誰じゃ?」ときかれ、どこそこのだれだれだと答え、「気をつけて帰れ!道草すんでねぞ」と言われ走って帰った。その時の艦載機も東の方角から西の方向(東京湾)へと飛んで行った。

2~3日して学校の帰りに、お礼にと小屋のおじさんの所に立ち寄ったら、おじさん夫婦は笑いながら「ほれッ!これを見せろ!」と、この間の機銃掃射の葉莢が40~50個入ったバケツを、地面にひっくり返して見せてくれたのにはびっくりしながら、物珍しく見入り、あれこれと触ったりしたのが今でも鮮やかに記憶に残る。それ以後、両親は私の通学路は危険だからと言って変更され遠回りになった。このころ日立航空機千葉製作所内で働いていた飯場の朝鮮人が負傷したという話を聞いたことがあった。



機銃掃射 高橋徹さん画

*戦後1名は確認(「朝鮮人強制連行調査の記録 関東編1」P281 証言)

思い出したくない、嫌な蘇我町空襲の生臭い悲惨さを垣間見た

(1) 空襲警報で逃げまどう辛い明け方の体験

1945年6月10日の明け方、日立航空機千葉工場のぶきみな空襲警報のサイレンに叩き起こされ、私は枕元の防空頭巾を被り家族とともに、近所の頑丈で大きな防空壕に所狭しと入らせていただいた。

暫くすると、爆撃機の轟音と共に防空壕は揺れ、不安そうな声でコソコソつぶやいていた時、「防空壕は危ないから早く山の方(現在の白旗)へ逃げろ!」と言われ、みんなして急ぎ足で大巖寺方向に向かって、蘇我駅前を通り過ぎ、蘇我踏切(現在は今井跨線橋)の手前にさしかかった時、今度は「早く隠れろ!」と言われるまま、みんな思い思いに線路わきの資材置き場の中へ潜り込むと、遠くから「ドスン、ドスン」と鈍い音と地響きに驚きおののき、周りは今まで何事もなかったかの様に「シーン」と静まり、固唾を呑み、息を殺した異様な重苦しい雰囲気と、外の様子が気になりだが何とも言えぬ不安な一時が過ぎた。

ある人が勇気を出して外に出たとたん「なんだ!これは!どうしたのだ!」と訳の分からない声に、大人たちの一部が外へ出たのに続いて、日立消防隊の消防車の手動サイレンが蚊の鳴き声のように「ウ〜ウ〜ウ〜」と弱々しく鳴るのが聞こえたとき、周りの人たちは「解除だ!解除!」だと叫びつつ外へ出たので私たちも外へ出た。

外へ出てみたら周りはいす暗く、空は鉛色で重苦しかった、よく見ると電線がちぎれた蜘蛛の巣の様に散らばり、剥がれ飛ばされたトタンや倒れかけた電柱などが道を塞いでいた。周りに目が慣れるにつれ大人たちの顔は黒く汚れ、ズボンに泥水につかっただままだった。顔や衣装の汚れは子どもより大人がひどかった。ともかく、つまづかない様に、足元に気を付けながら、みんなノロノロ歩き力なく家へ帰った。

(2) 蘇我空襲のむごい悲惨な負傷者たちの姿は、今も脳裏に鮮やか!!

家に帰るや否や、近所の役人が来て「勤労奉仕だ!付いて来い!」と父親をどこかへ連れて行った。

それは夜になって分かった。蘇我1丁目付近が明け方、B29の爆撃で家屋が滅茶苦茶に破壊され生じた多くの死傷者の救援活動と跡かたづけに多数の朝鮮人が飯場から動員されたと言う。

その日、今井町、蘇我町一帯の国道(現在、県道)は通行止めになされ、付近の人たちには「外へ出るな!」と言われたが、私たち数人はそれを無視して道路沿いの今井神社鳥居(日立航空機千葉工場正門入口の前)の後ろの茂みの樹に登り、身を隠して、何事があるのかと目を凝らし、息をとめ静かに様子を探っていたら、なんとリヤカーに座ったまま腕のないような人、頭や顔を赤黒い包帯や手ぬぐいなどでグルグル巻いた人たちの痛々しい姿に「ゾッ」と身ぶるいするほど、恐ろしくも

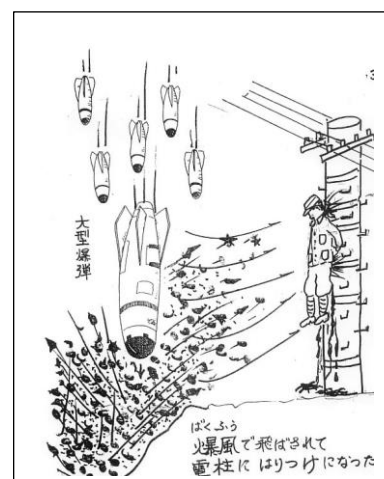
あり気の毒で、まともに見られなかった。次々と日立の正門近くの病院に運ばれた。そのあと、大八車、牛車にはお尻の辺りが血で染まり、ふくらはぎの肉がえぐり取られ、はみ出しているように血がにじみ出ている重症者たちが横たわった姿で運ばれてきた。

それに続いて、ムシロやゴザを被せた何台もの牛車が五田保の方へ行ったので、福正寺(今井町)の火葬場に運ぶのだなと思った。

数日間、火葬場の低い煙突からは嫌なにおいとうす黒い煙が、毎日南風に乗って「飯場(五田保)に流れ漂い飯も食えなかった」、夜は「火の玉がうようよ浮いていて、外での立ち小便是怖い思いをした」と、戦後、飯場の人たちから「幽霊話」に随分聞かされた。この火葬場の跡には、現在慰霊碑が祀られている。

数日間の勤労奉仕を終えて帰ってきた父親は、蘇我町一帯は爆撃で家々はめちゃくちゃに壊され、がれきの中から多くの怪我人を助け出したり、死体を指定の場所に集めたり、壊れた家のがれきの後片付けをさせられた。こんどの爆撃の目標が2基の「ガスタンク」なのに一発も当たらず、「タンク」から離れた周辺の民家がほとんどやられた。「戦争はひどいものだ！こんなに惨いこととは知らなかった。今の話を忘れるでないぞ」と、懇々ときつく諭された。

現在の川崎町JFEスチール東日本製鉄所正門辺り(今井3丁目)から蘇我2丁目のはずれの間には、10m四方の爆弾の穴が2個ずつ並び、雨水で無数の池になっていた。海で遊んでの帰りには、そこでみんなして体を洗ったりして遊んだ。ここは現在国道357号線。



6月10日の空襲 高橋徹さん画

*私も、千葉空襲による朝鮮人の被害について関心を持ってきたが、死亡に繋がる資料を見いだせず、2~3人の負傷者のうち1名確認。

「排他的民族差別の受け身の苦痛は言葉では言い尽くせない！」

私より年下のちびっ子らが、それも一定の距離を保ちながら、

「アイツ 鮮人だ！鮮人だ！」

と、それも集団ではやすように叫ぶのを聞いても、初めの頃は、あの罵声が私に向けての叫び声だとは知らなかったし、今まで、その様な仕打ちを受けたこともなかった。それは「飯場」で隔離されていたからだと思う。

その様なわけで、それが民族差別だとは全然知らなかったもので、何回かは相手にもせず、見向きもせず知らんぷりしたけど、あまりにも酷く「ヤッ！鮮人だ！」と叫びながら「アッカンベ！」、

鼻に指を当てろあな真似など色々なしぐさで仕掛けて来るたびに、私は「この野郎！」とありったけの大声と体で威嚇することで、暫くは母の言いつけを守り、我慢してきたけれど、これ以上は耐えられないと母親に言っても「知らぬふりをしろ」と言うだけだった。

このような民族差別を意識したのは、蘇我国民学校2年生(1945年)の5月ごろからであった。それ以前は日立航空機千葉工場内の「飯場」から通学していたので、我が家の事情について知る人はいなかった。米軍による本土空襲と関連して、日立は現在の大網白里市に疎開し、我が家も日立の旧正門前の今井町の物置小屋(農機具など)を借りて、改造した住宅に移ったのが4月ごろだったので、それ以降、大家をはじめ周りの人々に、我が家が朝鮮人である事は素早く知れ渡り、広がったと思われる。

ちびっ子らのいじめを無視し続けるので、奴らは石を投げながら「弱虫、毛虫、鮮人野郎！」と更になお一層激しく叫びながら迫ってくるようになった。奴らは一人の時は必ず私を避けるか、隠れてしまう癖に、複数の時は、よってたかって迫ってきた。(赤信号もみんなで渡れば怖くない)

頭や額にはコブを、顔は腫れぼったい傷、惨めな姿では帰れず、近くのどぶ川で顔を洗い衣服の汚れを落とし、何事もなかったかのようにそと家の中へ入った。

この様な辛い日々は毎日のように続き、はなはだしくは家の前まで追っかけて来て「鮮人！帰れ！」と罵声を浴びせるようになり、母親は両手コブシを大きく振り上げ「この野郎！」と殴るしぐさで追い返したりした。

奴らは罵声と石をぶっ投げるだけではなく、こんどは棒切れを振り回したり、竹切れで突っついたり、差別的いじめは日増しにひどくなり、私がかむしゃらに立ち向かったものの、やられっぱなしで帰って来た哀れなせがれの姿を見た母親は、どうにもならない悔しさ、いたたまれないやるせなさ、惨めな苦しみに耐えられぬ腹立たしさで、「バカ息子！やられっぱなしで泣くな！何のために飯食ってんだ！オッパイを呑んだ力を出せ！」と怒られた。

それ以後、やつらに遭遇すると、カバンを盾にして顔をかばいながら突っ込んでいった。するとパラパラと逃げ出すので、追いかけて捕まえた野郎に、馬乗りになって、殴る、蹴る、踏んづけたりして反発したものの、今度は年上の連中を引き連れて私の帰り道で待ち伏せしていた。4~5人に取り囲まれ、「生意気な鮮人だ！やっちまえ！」とよってたかって殴る蹴るのに併せ、ちびっ子の復讐が、ところかまわず繰り返された。

私は、年長連中に死ぬつもりで歯向かい、手を掴み噛んだり、逃げる輩の足を引っ掴み噛んだり、棒切れや、竹切れ、石を投げるなど、力任せにやれることは何でもやり復讐した。私の反発を食らった連中は、親と巡査を引き連れて、家へ抗議に来た。連中の親どもは「弁償しろ！謝れ！鮮人を懲らしめろ！」と騒ぎわめくので、母親は「あんた達の子どもがいじめた結果だ。仲良くしていればこんな事にはならない」と反論したら、巡査が「鮮人のクセに生意気だ！謝れ！」と往復ビンタ、

母親は私に「お前も謝れ！」と朝鮮語で言われ謝ると同時に「日本語で話せ！」とまた往復ビンタ、「死にたくなければ、おとなしく言うとおりにしろ！」と怒鳴りつけて帰った。それからばかりっ子らと遭遇すると、差別的な暴言を吐くだけになった。

私はそれまで毎日、顔と脚は傷とアザだらけ、頭と額はコブだらけ。当時の怪我がもとで、左目に障害が残る。当時、医院に行った記憶はない。

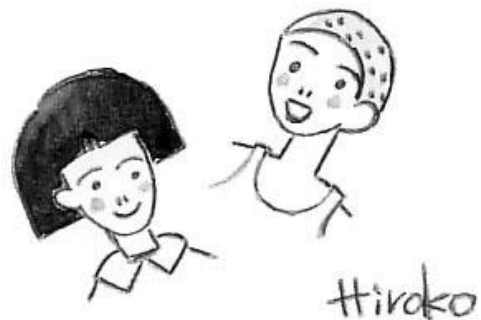
6月の下旬から学校へは行かなかった。

ある日、クラスで突然「鉛筆が無くなった！」と誰かが先生に告げると、先生は各自の持ち物をよく調べるようにと指示したが、見つからなかった。すると、先生に「〇〇お前だろう早く出せ！」と怒鳴りつけられ、「知りません」と答えると「みんな鮮人には気を付けろ！」と一喝した後、鉛筆は見つかった。

数日後、今度は「消しゴムが無くなった」と騒ぎ立て、みんなが探しても見つからなかった。「鮮人！〇〇前へ出ろ」と言われ指示された教壇に上がると「またお前だろう！鮮人のくせに生意気だ！」と、言うと同時に背負い投げで飛ばされた私は、うさぎ跳びで机の上をバタン、バタンと跳び、自分のランドセルを手に取り、先生に向かって「こんな学校なんか来るものか！」と精一杯大声を張り上げ、窓から校庭に飛び降り、白旗町の方向に逃げてからは、学校へは行かず、山で時間を過ごす連中と一緒に遊んだりして、鶉の帰りを見て家へ帰った。

一学期の終わりまで、家では学校へ行けとか何をしているのか聞きもせず、毎朝弁当を持って家を出た。二学期の始め、担任の先生が訪ねられ、学校へ戻るようにと謝罪したけど、父は「朝鮮は解放されたので、故郷へ帰るので気を使わなくていい」と言い、米国製タバコ「ラッキー」を1カートン差し上げ、丁寧に断った。

それから9月半ばごろまで、私は家で父親から「ハングル文字」と漢字「千字文」を習い、五田保飯場での「国語講習所」が始まると、そこへ行った。だが行っても同じ同胞なのに信じられず、ケンカばかりしたので、父親に「行くな」と言われ、家での勉強が1946年の3月ごろまで続いた。差別的暴言と暴力はしゃくにさわり、我慢するのは悔しくて胸が塞がり死ぬ思いだった。ケンカで悦びを感じる人間不信に「乱暴な性格の持ち主」と嫌われ避けられたが、朝鮮学校で温厚な性質と民族性を身につけることができた。



日本と韓国-朝鮮の動き	康景壽さんの生涯	年齢	千葉県の朝鮮人口
ポーツマス条約 第2次日韓協約(外交権剥奪) 韓国初代統監伊藤博文	1905年 明38		—
	1906年 明39	康景壽さん誕生、済州道の農家に生まれる	0歳 —
第3次日韓協約(軍隊解散、警察権剥奪)	1907年 明40		1歳 —
	1908年 明41		2歳 —
伊藤博文、安重根に射殺	1909年 明42		3歳 —
韓国併合に関する条約 朝鮮総初代総督寺内正毅 土地調査事業開始(～1918年)	1910年 明43		4歳 —
	1911年 明44		5歳 —
	1912年 明45/大元		6歳 —
	1913年 大2		7歳 12人
第一次世界大戦(～1918年)	1914年 大3		8歳 24人
	1915年 大4		9歳 20人
	1916年 大5	父死去、宗孫19代を継ぐ	10歳 —
	1917年 大6		11歳 128人
ベルサイユ条約	1918年 大7		12歳 21人
3・11独立運動 米騒動	1919年 大8		13歳 16人
朝鮮産米増殖計画開始	1920年 大9		14歳 25人
	1921年 大10	結婚	15歳 34人
	1922年 大11		16歳 —
済州島と大阪に定期航路(君が代丸) 関東大震災 朝鮮人等虐殺	1923年 大12		17歳 81人
	1924年 大13		18歳 445人
治安維持法 朝鮮では治安維持令	1925年 大14		19歳 1,172人
	1926年 大15/總元		20歳 —
朝鮮土地改良令	1927年 昭2		21歳 —
	1928年 昭3		22歳 1,419人
世界恐慌	1929年 昭4		23歳 1,227人
	1930年 昭5		24歳 1,254人
満州事変	1931年 昭6		25歳 1,539人
満州国建国	1932年 昭7		26歳 1,657人
	1933年 昭8		27歳 2,074人
	1934年 昭9		28歳 2,227人
	1935年 昭10		29歳 2,690人
ベルリンオリンピック 孫基禎金メダル、南昇竜銅メダル	1936年 昭11	夫婦で渡日 大阪市猪飼野に落ち着く	30歳 2,892人
日中戦争勃発	1937年 昭12	東勲さん誕生	31歳 3,244人
国家総動員法(在日朝鮮人適用)	1938年 昭13		32歳 3,600人
国民徴用令 「会社募集」による日本への労働動員開始 第二次世界大戦勃発	1939年 昭14		33歳 4,117人
「創始改名」実施	1940年 昭15		34歳 4,030人
太平洋戦争勃発	1941年 昭16	国内徴用で東京の旧荏原区小山町、江古田、南品川等を転々	35歳 5,077人
「官斡旋」による日本への労働動員開始 朝鮮人徴兵制閣議決定	1942年 昭17		36歳 7,421人
学徒兵制実施(朝鮮人は志願)	1943年 昭18		37歳 —
朝鮮人に徴兵検査 「徴用」による労働動員開始	1944年 昭19	4月 東勲さん、荏原国民学校1年生に入学(6歳) 7月 国内徴用で日立航空機千葉工場内に転居(両親、弟・妹の5人) 東勲さん、蘇我国民学校登校せず	38歳 12,763人
東京大空襲	1945年 昭20	3月 9日、東京大空襲の赤い夜空を東勲さんと見る 日立航空機千葉工場、大網地下工場に疎開のため工場外に転居	25,000人
アメリカ軍、沖縄上陸	4月	東勲さん、蘇我国民学校2年生に転入(7歳)	
8月6日広島原爆投下	6月	10日、蘇我町空襲の片付けに駆り出される	
8月9日長崎原爆投下	8月	東勲さん、担任と児童から差別を受け登校拒否	
ポツダム宣言受諾	8月 15日、祖国解放		
	9月	蘇我国民学校の担任、謝罪し復学要請するが断わる	39歳
	10月	東勲さんを五田保(蘇我)の『国語講習所』に通わせる	
	暮れ	焼酎製造を始める 後に養豚 自己負担で電気を引く(間電気と呼ばれた) 千葉済友会設立(12戸) 代筆や飲食業開店の支援	
済州島4・3事件 島民への弾圧 大韓民国樹立 朝鮮民主主義人民共和国樹立	1948年 昭23	3月	42歳 —
朝鮮戦争勃発	1950年 昭25	6月	44歳 —
サンフランシスコ講和条約発効 日本国籍剥奪	1952年 昭27	4月	46歳 9,430人
	1955年 昭30	4月 千葉朝鮮小学校教育会会長(死去まで) 5月 千葉済友会解散し、朝鮮総連設立し千葉支部副委員長になる	49歳 8,360人
	1956年 昭31	3月 東勲さん、大阪で20代目宗孫として披露(18歳)	50歳 8,168人
	1958年 昭33	10月 川崎製鉄工事現場で事故死	52歳 7,680人

【引用資料】「朝鮮人強制連行調査の記録-関東編1 神奈川・千葉・山梨」朝鮮人強制連行真相調査団編著 柏書房 2002年
「写真で見る在日コリアンの100年 在日韓人歴史資料館図録」在日韓人歴史資料館編著 明石書房 2008年
「千葉県統計年鑑」千葉県